

一般社団法人 ゴジョる
代表理事 菊池 隼さんに聞く

釜石市での「薪づくり」で実現する、 地域で経済がまわる循環の仕組み

1月の能登半島地震で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を祈念いたします。今回は、2011年3月に起きた東日本大震災を乗り越えて来た、岩手県南東部の釜石市の例を取り上げます。東日本大震災の被災状況は、死者1,064人（行方不明者数152人、関連死認定者数106人を含む）で、家屋の被害数は4,704戸（家屋数16,182戸のうち29%）でした。あの震災からこの3月で13年を迎えます。震災後から釜石市にボランティアとして入り、現在は一般社団法人ゴジョるの理事長をしている菊池隼さんは、薪の生産・販売を通して地域経済をまわし、若者が生まれ育った地域で暮らし続けられる「地域づくり」を目指して奮闘しています。

釜石市は古くから「鉄と魚のまち」として知られてきました。明治初めに官営の製鉄所が作られ、戦後は特に鉄鋼産業・水産業などが活発化し、多くの若者が県内外から集まる活気ある地域でした。釜石市の人口は急激な増加を見せ、国内経済の景気拡大にも助けられ1963年にはピークの約92,000人にまで膨れあがりました。しかし、鉱山が閉鎖され、また関連企業の縮小によって町の雰囲気は一転。出稼ぎ、進学などのために若者が流出し始め、出生数の減少などもあいまって人口減少と高齢化が

進みました。

そんな状況にあった釜石市を東日本大震災が襲ったのです。絶望の中で大人たちは



薪の生産は地域の力で行う

口々に「この町はもう終わった」と嘆きました。しかし、瓦礫を撤去するボランティアをしていた菊池さんは、本当にそうだろうか？ そうではないということを未来ある子どもたちに伝えたいと思うようになります。

仕事を生み出すゴジョるの活動

釜石市の北部に、リアス式海岸に面した箱崎地区があります。震災前は273世帯、734人が暮らしていましたが、津波で86%にあたる235世帯が被災し、72人が犠牲になりました。震災後は高台や造成地への住宅移転が進められ、2021年には高さ14.5mの防潮堤が完成しました。

現在、「ゴジョる」が活動の場としているのは、津波で浸水した土地です。住宅地としては利用不可となった場所で、地主さんも困っていたところを、ゴジョるが薪製造の作業場として借りることにしました。その土場で、この日は10人のメンバーが黙々と薪づくりをしていました。30代から80代までの男女で、なかには高台移転のために漁業権を失った元漁師などもあります。

薪の製造販売は、最初は5人からのスタートでしたが、「うちの息子も家にこもりがちなんだけど、どうかな」と口コミで取り組みが広まり、今では48人、年間でのべ3,000人が働く場所となりました。薪の生産量は月80トンで、年間3,000万円の売上になっています。時給は1,000円換算ですが、高齢者の場合は老齢基礎年金にプラスして、月3万～6万円の収入になり、薪づくりの仕事が生計を支えています。

震災からの新たな地域づくり

菊池さんは、釜石市から約80km離れた、北上市の出身です。震災当時、公益社団法人北上青年会議所の一員として、岩手県沿岸部支援を開始しました。

「震災から1週間で釜石市に入りました。最初は、内陸部からの物資の緊急支援などが中心でした。北上青年会議所のメンバーは若手経営者の集まりで、横の繋がりもあり、物資も集めやすい状況でした。また、仲間に運送会社の人がいて、トラックを借りやすい。他にも、青年会議所としては、県外からボランティア人材の派遣もしました」

その後、北上青年会議所としての支援事業が終了すると、菊池さんは、釜石市に残る決断をします。長期化が予想される課題を前に、2012年からは社会福祉法人釜石市社会福祉協議会と協力し、ボランティアセンターの運営支援を行うNPO法人を作りました。社会福祉協議会と一緒に、見回り支援などを通して被災者と関わるうちに、「孤立」「孤独」「困窮」などの課題が見えてきたと言います。

「沿岸部に住んでいた人の多くは、高台や公営団地に引っ越しましたが、車がなくて買い物に行けないという理由で、日が



代表理事の菊池さん



植樹した高台より箱崎地区を眺める。
防潮堤のすぐ左が、薪割り場



左：周囲の山林に放置されていた材を運んでもらい、薪に加工する

右：この日は、男女10人が薪づくりに勤しんでいた

な一日テレビを観て過ごす引きこもりの『孤立』生活になり、やがて『孤独』からアルコールを飲むようになって依存症になるという負のスパイラルに陥っていました。また、震災による住居移転で地域コミュニティが崩壊し、稼ぎ手も亡くした人が多くいて、一人暮らしで経済的に『困窮』する高齢者、あるいはこれから高齢になる層が増えました。釜石市では、震災前より高齢化が進み、高齢者の就労の場や生きがいとなる場が少ないことが課題の一つでした。それが震災で深刻化したわけですが、そういった社会課題が浮き彫りになるなか、心のケアやコミュニティの再建、そして、生きがいのある仕事づくりの必要性を感じ、2017年、『互助』から名づけた『一般社団法人ゴジョる』を立ち上げました」

目指すのは自助や 互助のある地域

ではなぜ、地域づくりが薪づくりへと繋がったのでしょうか。近年の釜石市では、山火事や森林に関わる災害が続いており、2019年の台風19号では、倒木が雨によって流されて民家に突っ込みました。そして、山には切り捨てられたまま置き去りにされた材がたくさんあることに気が付き、「漁師が薪を作って売ったらおもしろい」と思いついた菊池さん。もともと、震災前から広告会社を立ち上げていたので、商品の売り方には自信がありました。

また、この地域の人は家を新築するとき、震災の経験から薪ストーブを設置する家が多いと菊池さん。電気やガスが使えなくなる怖さから薪の需要が一定数あって、さら

にその人たちが薪を得るために、県の内陸部まで80kmくらいの距離を移動していることを知ります。

「薪なら地域で生産できますし、近隣であれば配達もできるので、誰かの役にたっているという実感が得られやすいのです」。さっそく地域の森林組合に掛け合って、山に放置されていた材を運んでもらう算段をつけます。その木をチェーンソーで玉切りして小さくし、薪割り機で太さや長さを整形します。薪は小ロットのオーダーにも対応でき、現在、26商品を用意しています。今では、町内30件ほどの取引があり、80代の一人暮らしのおばあちゃん宅への配達もしています。

「薪といっても特徴があり、針葉樹か広葉樹かで燃え方や火の持ち具合が異なります。また、窯や薪ストーブの大きさは多様なので、それに合わせてサイズを調整します。ちょっと変わったオーダーですと、ヤナギ材のみを希望される方もいます。窯にこだわったピザ屋で、窯温度の上がり方を理想的にするにはヤナギ材が最適だと言われます。去年は、そのピザ屋が町にわざわざ来てピザを焼いてくれました。ピザ屋がない地域なのでみんな大喜びでしたし、励みにもなりました」

ゴジョるでは、何年か前に脳梗塞を起こして片足が不自由になった人などが働いていますが、そういった人はなかなか就職できず生活が困窮してしまいがちです。「生活困窮者自立支援法」もありますが、制度の狭間でこぼれ落ちてしまう人もいます。菊池さん自身、幼い頃はシングルマザーの家庭で育ち、経済的な苦しさを身をもって

情報誌『月刊マネジメント倶楽部』についてはこちら→ <https://www.zeiken.co.jp/mgzn/management/>
無断転載を禁じます ©税務研究会

文／平井明日菜、写真／上垣喜寛

知っていました。

「衣食住に困っていてもプライドがあって、食べ物をもらってまで生きたくないと思う人がいます。でも、社会に必要とされて生きたいという気持ちがあるから、仕事があるのは大事なんです。こういう状況に置かれた人は全国にもたくさんいるでしょうし、高齢者や障害者やマイノリティ、男性にかぎったことではありません。女性の貧困なども大きな課題です。この人たちはまだ地域を支える力になれる人材ですから、仕事を創出するのは大きな意義があります」

誇りをもって生き続けるために

日本は全国的に少子・高齢化が課題になっていて、ともすれば移住者、若者の取り合いになってしまいがちです。しかし菊池さんは、そうではなく、そこで生まれた人が最後まで暮らせる仕組みづくりで地域が成り立てばよいと思っています。そして、釜石市のように、人口減少・高齢化という日本社会に迫り来る未来をすでに体現している地域から、新しいモデルを作っていきたいとの意気込みを抱いています。

菊池さんは土場と目と鼻の先の山を指差しました。6年前に新たに木を植えた場所です。山を切り崩して住宅用の造成地として整備された土地でしたが、他地域に移転した人がもうこれ以上は戻ってこないことがわかり、使われることが見込めなくなった土地でした。

「山の管理を適切に行って、やがて木が成長したらここが薪の生産地になるでしょ

う。そして、山のすぐ下に薪の加工地がある。薪の消費もこの地域でやれたら、この地域で薪の生産、加工、消費まで可能になり、地域経済がまわるんです。構想を練っています」

現在は、わかめの加工にも目を向けている菊池さん。釜石市を含んだ三陸の沿岸部では、わかめの生産が盛んで、1月中旬くらいから陸揚げが始まり、長期保存できるように塩蔵わかめに加工する作業が行われます。しかし、近年、燃料代や資材費が高騰しており、その影響でわかめ自体の値上げを余儀なくされています。

「わかめのボイル作業には海水が必要なので、海に近い港などでやるのですが、箱崎漁港は薪の加工場の目と鼻の先です。それに、わかめを茹でるときにガスではなく、薪を使えばコストも抑えられます。そうやって、地域で経済がまわるような循環の仕組みを作りたいんです。仕事があれば若者や子どもたちが暮らし続けられます。誇りを持てるような地域にしていきたいです」



商品の長さや太さはニーズに合わせて開発している



根浜地区の高台より、根浜漁港（右下）と大槌湾を望む。山と海が近いのが、このあたりの地形の特徴だ